



1991 年(平成三年)
11 月号(No. 558)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

浅間山の女性遭難の頃
.....中村テル.....(1)

海外の山.....(2)

「長谷川恒男の死」
ナムチャバルワ通信(2).....(3)

南アフリカ山岳会の百周年記念
パーティに出席して
.....阪本公.....(4)

東西南北.....(5)

「ヒマラヤのエーデルワイス探訪
記」「カナデアン・ロッキーに登
る(1)」ほか
書籍・雑誌受入報告、所蔵山岳地図
目録.....(9)

図書室だより(3).....(10)

図書紹介.....(10)

「死のクレバス」「名古屋からの
山なみ」ほか
自然保護随想.....(13)

報告.....(13)

「青年部報告・ムスターグ・アタ山
登山」「四川省羊拱山に登る」ほか
会務報告.....(16)

9 月理事会、ルーム日誌、山研・
ナムチャ合同募金応募状況、新入
会員(復活)、住所・住居表示変更
お知らせ.....(18)

浅間山の女性遭難の頃

中村 テル

何うしても、なんとかして、いつで
も、山に出かける時に、気兼ねしないで、
ズボンを着いて、リックサックを背
負って出かけるような世の中にならな
いかしら……と随分真剣に考えまし
た。そして社会で女の集団として一番
信用されているキリスト教女子青年会
を選び、その体育部に山岳会をおか
せていただくように、熱心に説いて廻
りました。誰も登山とか、スキーを女
子の運動とは考えておりません昭和四
年頃でした。

私は大正時代より職業婦人(現OL)
として、東京基督教女子青年会(YW
CA)に初めてクラブを創立しました

のでその延長として、スキーや登山を
楽しむ女子の団体を作りたいと数年考
えており、遂にスキーを既に楽しんで
おる、四、五人の女性を紹介してもら
い、昭和六年に本格的な女子の山岳会
を東京YWCAに創立することが出来
ました。準備に約二年はかかりました、
その創立会員の中に三田好子さんがお
られ、創立当時より、よく山やスキー
に出掛けられたのであります。当時、
東京鉄道局が盛んにスキー学校をひら
き、河上寿雄先生などが指導されまし
た。

まだ、清水トネルが開通しませ
んでしたので、今日のように上越にス

スキー場はありませんでした。一番近い
のは奥日光ゲレンデで数年後に霧ヶ峰
スキー場が出来ました。もちろん、ど
こにもリフトはなく、シールをつけて、
登るのが大切なテクニクの一つであ
りました。

霧ヶ峰スキー場が開かれたその開場
式にも女子の団体代表としてYWCA
山岳会が招待されて諏訪の人達にズボ
ン姿の女達を沢山ながめさせました。

乗物がありませんでしたので、街の人
達は牛に乗って女子スキーヤーを見物
して驚いていました。

諏訪の旅館から私達は、毎日スキー
をかっいで霧ヶ峰まで往復し、三田好
子さんは妹の正子さんを誘って、二人
で車山まで登ったり、池のそばまで直
滑降をし、たのしまれました。当時は

霧ヶ峰には一軒の小屋もありませんで
した。

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテラフ電話
3234 六六五九

妹の正子さんは
東京鉄道局に勤務
されて、よく、山
に、スキーに出か
けられました。
昭和九年正月に
好子さんと正子さ
んは鉄道省の連中

と鹿沢に行く予定ときき、そこは主人
の佐藤信彦や藤島敏男さん、黒田正夫
・初子さんが初めて、スキー場として
開拓? した新しいスキー場であり、
まだ余り一般に知られていませんでし
た。私は紅葉館の小林亀蔵に彼女達の
ことをたのみ、月末にはその楽しい話
をきくことが出来ると心待ちに待つて
いました。

一月二十七日に私が勤務先の日本
フォード自動車会社に電話があり、何
うも鉄道局の連中とYWCA山岳会の
二人が遭難したらしいとの事でした。
フォード会社はまだ子安町で組立をし
ている頃でした。

私事で、会社を休むなどは殆ど許さ
れない程世界中に名が轟く程きびし
い、フォードシステムの会社でした。
しかし遭難となれば、会長の私が出掛
けなければならず、その休暇願いを何

う理由づけるかは、私にとって大変な悩みでした。私が山やスキーに出かけることは既に有名でしたが、そのために会社を休んだ事は一度もありません程、私は優秀な社員でした。

—◇—◇—◇—

浅間山で遭難したらしいとの新聞社の報告をうけ捜索本部を峯の茶屋におき、続々と東京鉄道局から捜索員が浅間山に登ってきました。新聞社からも記者達が馳せ参じたのですが、誰も、深い雪道を杓掛から峯の茶屋まで、スキーで登れる記者はおりませんでした。僅に、当時、読売新聞社運動部の記者であった稲門の小島六郎さんだけが、スキーに、シールをつけて登ってこられました。

—◇—◇—◇—

三田姉妹のスキー遭難は、日本のスキー歴史で最初でありましたので、当時としては非常に珍しいヘリコプターを出して空中から遭難者を探したり、ニュースを円筒に入れて投下したり、新聞社としても画期的な捜索態勢をとりました。

今も昔も変わらぬことは、記者は読者本位に多少、興味ぶかい記事を作ります。万一、折角、女子のスキーや登山が理解され始めた時に、各家庭や、社会から非難めいた事をきくことを一番深く気づかいました。捜索は非常に難

海外の山

長谷川恒男の死

秋のヒマラヤは、悲報続きである。

十月十日、世界第三の未踏峰・カラコルムのウルタルⅡ峰(七七三八呎)で長谷川恒男(四三)が、星野清隆(三一)と共に雪崩に巻き込まれ、逝った。

マカルー(八四六三呎)では、同十三日、ベルニナ山岳会の石坂工(二六)が登頂後、悪天候に動けなくなり、死亡、長野妙子も、凍傷で手と足十数本の指をやられた。八千二百呎の高所で、三十六時間に及ぶ壮烈なヒバークの末の死と生還だった、と聞く。

三日後の十六日、未踏峰中の世界最高峰、ナムチャバルワ(七七八二呎)でも、大西宏が雪崩で二十九歳の人生を絶たれた。国際隊に参加して北極点まで歩き、チョモランマに登り、来年は南極点までの徒歩到達を目指そうという元気者だった。

モンゴル高原で長谷川の死を知り、帰国すると本人から二枚のハガキが届いていた。

ウルタルⅡ峰は、双耳峰である。Ⅰ峰(七三二九呎)は、一九八四年に広島山岳会隊によって登られた。Ⅱ峰へは、八六年に日本バキスタン合同隊が挑戦したが、五千四百呎地点で断念している。長谷川隊は、昨年秋にこの山の頂上直下三百呎迫りながら、登頂ならず今回が二度目の挑戦だった。

昨年のメンバーだった京大医学部出のドクターが、帰国直後京大土山岳会梅里雪山隊に参加、あの大遭難で帰らぬ人となった。長谷川は今回の登山計画書の最後を

こうしめくくっている。

「誰も死を望んではいけません。しかし死はすぐ目の前にあるのです。越えなければならぬ危険もあります。危険を覚悟で一步を踏み出すのは、誰のためでもなく、自分の生きていくひとつの証しなのだと思います。遭難した清水君の果たせなかつた山への思いとともに、私は新しくメンバーに加わってくれた若い仲間たちと一緒に再びウルタルⅡ峰に向かいます」

アルプス三大北壁の、「華麗」と言われた冬季単独登攀以後、長谷川恒男はヒマラヤやアコンカグアを舞台に高峰登山を続けてきた。組織に頼らずに、自分と気の合う仲間たちとの自由な雰囲気での登山を好んだが、登攀そのものは苛烈だった。

冬季、壁、ダイレクト、単独。そんな条件が長谷川の山につきまとった。無論、後方に妻や支援の仲間たちがいつもいたし、パートナーとの登攀もあったが、好んで厳しい条件の登攀を実践した、との印象が強い。

その結果、登攀成功率は、非常に低い登山家の一人となった。あれだけのクライマーが四度チョモランマ(あるいはエベレスト)に挑んで、一度も登っていない。

が、それでも何度でも行く。この強靱な登山家が六十歳になった時のことを、筆者は考えたことがある。一体、どれほど長く登り続けるだろうか、という密かな期待を持っていた。登頂しなくとも、帰ってくればいい。

春のマチガ沢本谷で、十数人の中高年登山者を連れて上がったきた長谷川と出くわしたことがある。メンバーは皆ひどく楽しげで、しかも気合が入っていた。長谷川自身は心優しき「山の先生」の顔をしていた。

いい山登りを教えられる人間を失った。(江本嘉伸)

行し浅間山を中心に鬼押し出しから鹿沢まで広範囲に約一〇〇人に近い鉄道の方々が協力されました。

鉄道局の一人の若い青年の赤い手袋だけを浅間山の中腹のデブリあとで発見しました。それがきっかけで、鉄道局員六名と三田好子、正子姉妹もその沢で発見されました。

その後数年間はスキー場で赤い手袋をみますと、その若い青年の手と凍った顔、スキー帽が左のほほに凍りついた姿をいつも思い出さずにはおられませんでした。

「海外登山基金」

助成登山隊報告

日本山岳会京都支部

テイリッチミール登山隊

登山隊長 須藤建志

京都支部は支部創立五周年を記念して、アドベンチャー・ファウンデーション・パキスタン(A・F・P)と合同で、ヒンズークシユのテイリッチミール(七七〇八呎)の登山を行なった。日側は橋本龍太郎総顧問、斉藤博生支部長を総隊長に登攀隊員七名、パ側はイス・ハク・カーン大統領がチーフ・パトロン、A・F・P会長J・ナディール・カーン副総隊長、登攀隊員

● ナムチャバルワ通信(2) ●

九月十九日、成田を出発した日本側登山隊は北京、成都を経て、二十三日中国側隊員の待つラサに到着しました。今から高峰に登るとは言え、ちょっと走ると三七〇〇呎の高地だけあって足元がフラつく感じがです。ラサでの壮行会では西藏自治区人民政府主席を始め、自治区の要人一二人余りが出席して行なわれ、ローサンダワ総隊長が力強く登頂宣言を行いました。二十六日にはいよいよラサを出発。ポタラ宮下の文化公園での盛大な見送りを受けての四輪駆動車十三台、トラック二台の列はラサ河を越え西藏公路をひた走りました。ミイラ(五〇〇〇呎)を越えるとニヤン河に沿って走る様になり、今までの乾燥した大地であった西チベットの光景から、広葉樹、針葉樹が現れ、空気も心なしか湿っぽく感じられます。特に今回は一日のうちには必ず降雨があり、樹林帯をガスがはい上がるさまは日本の山の様です。

一日目は約四四〇績走った八一鎮の招待所で泊まり、二日目はいよいよベースキャンプに入る日です。ニヤン河とヤルツアンポーの合流点を過ぎると、大橋を渡り今度ではヤルツアンポーに沿って車輪がはずむ悪路を走る様になります。今年の中国は各地で大洪水がありました、格(カカ)まで道の道も支流の橋が流出し、所々で修復作業が行われていました。派区の手前のカーブを曲った地点で突然ナムチャバルワが目目に飛び込んで来ました。まだ降雪



日中国交正常化 20周年記念

が多いのか去年の偵察時よりは白く光り輝く主峰が圧倒的でした。日中双方の隊員はカメラを取り出し一斉にシャッターを切

りました。昼過ぎに格嚙に到着。集まって来た村人達の中には見覚えのある顔もたくさんありました。

樹林帯の道を抜けるとそこはもう標高三五二〇呎の本宮(ベースキャンプ)です。十二張の中国テントが所狭しと張られ、今後約四十日間に渡って七十余人の人間が生活する場が作られていました。二十九日と十月一日は、装備の分配・大本営の整備に費やされあつたという間に過ぎてしまいました。十月二日よりいよいよ登山を開始。入山以来余り天気もパツとしないのでまず登山隊を二隊に分け、それぞれがC2まで往復しました。

同時に第一の難関であるラバ口の入口までの偵察を行ないましたが、予想に反して雪が少なく、C2も去年の偵察時は雪の上でしたが、今年は土の上にテントを張る事が出来ました。しかし六日、七日と降雪がありC2でも七時の降雪がありましたので、雪の状態は夏の終りの今が一番少なく、今後十月中に何度かの降雪をみて秋の状態になるのかも知れません。ひと月違つと周辺の様子もがらりと変わり、去年は枯れはてていた台地に、まだキキョウやその他種類の高山植物が咲いているのを見ることが出来ます。唯し「青いケシ」の花は既に枯れていました。明八日からはいよいよラバ口のルート工作が始まります。また登山隊員の全てが大本営を離れ上部での登山活動に専念する事となります。

読売新聞社の方では中島カメラマンが病気で帰国せざるを得ませんでした、登山隊の方は日中双方元気でやっています。C5までのルート工作、荷上げを終えて二十三日には全員がいったん大本営に戻る予定です。(この原稿は読売新聞社のインテルサット(海事衛星)を利用してファックスで送ったものです。ちなみにTEL 001 873 1570 776, FAX 001 873 91570776 へず。)

(重廣恒夫)

は六名であった。

七月一日に齊藤支部長、須藤健志登山隊長、堀江良明、船尾修、小田佳子、同行の山口克の先発隊はA・F・Pのあるアボックバードに入り、パ側隊員と初顔合せをした。副隊長のサジャード・H・シャー、S・タリッフ・サデーキ、M・ナデム・カーン、セイヤー・ド・M・タイヤブ、アタ・ウル・ハク、医師のフアード・カーンが隊員であった。アタは空軍大尉で昨年はナンガ・パルバットに登頂している。

帰国する齊藤、山口と別れた本隊は、チトラルから四日の行程で上部テリッチ氷河の屈曲点左岸(四八〇〇)のBCに七月十二日到着した。氷河上にC1(五八〇〇)、ABC(六四〇〇)と順調に作り、荷上げも終わり二十四日にはBCに戻り休養、二十七日には後発の宮川清明、松田謙介、百海琢司の三名が到着全員がそろった。

三十日、須藤、堀江、船尾、小田、アタ、タイヤブ、ナデムの七名はBCを出発し、八月一日には氷河の最奥にC3(六八〇〇)さらに氷のクローアルに十五Pのルートを開き、四日には西峰とのコルにC4(七三〇〇)を作った。五日全員でアタックに出発。七四〇〇付近でタイヤブが滑落したが、四〇〇以下のクレバスで

止まり、歩行可能で無事救助することができた。

ABCに待機した堀江、船尾、アタは九日C4に登り、十日に第二次アタックを行なった。強風と頂上へのルートが発見できず断念。

須藤、宮川、松田、小田、百海は十三日にC4、十四日に須藤、宮川、松田で第三回目のアタックに出た。しかし頂上に抜ける岩稜ルートに手間どり時間切れとなりC4に戻った。十五日、須藤、宮川の二人で岩稜を

南アフリカ山岳会の

百周年記念パーティーに出席して

九九〇三 阪 本 公 一

日本山岳会の要請を受け、山田会長代理として、標記のパーティーに出席して参りました。

ケープタウンのARTHUR'S SEAT HOTELに於て、九月二十八日(土)、十九時三十分より記念パーティーが催され、ケープタウン市長、南ア環境庁局長他多数の来賓の出席のもと、約四〇〇人近い盛大なパーティーが行われました。

海外からは、英国、スコットランド、ドイツ、ニュージーランド、ジンバブエ、アメリカ、インド等の山岳会の代

登りきり午後二時ついに頂上に立った。実に四度目のアタックであった。宮川は五十歳だが、BC到着後十九日間という早さで登頂した。

十六日にはC4の百海が嗜眠、平衡失調などの脳浮腫症状を来したので、すぐに下降救出を行なった。一二〇〇以下降してビバークしたが恢復著るしく翌日はBCに収容できた。

計画したゴミ処理は、下山時のアクシデントのため残念ながら上部は不十分であった。C1とBCではゴミの清

表が出席、極東からは日本山岳会のみでした。

英国からは、最近エベレストの無酸素登頂に成功したステファン・ベナブル氏が、特別ゲストとして参加しており、同じヴィニヤード・ホテルに宿泊されていたので、朝食をとりながら、また酒を飲みながら、親しく歓談する機会を得ました。長身、長顔の同氏は、加藤泰安先輩の若かりし頃の写真に、大変よく似ており、それだけに、より親しみを憶えました。

来賓および各国代表が多い故、本来

掃と空缶八〇〇個を処理、不燃物はアボックバードに持帰った。登攀中ほとんど毎日晴天であったのは幸運だった。

八月二十六日、大統領主催のレセプションに招かれた。登頂の報告をし、頂上の石を記念に差上げた。なおこの登山にはJACの海外登山基金の援助を受けた。感謝の意を表したい。



記念パーティー風景 (右から2人目ポール・マッティ南ア山岳会会長)

は各国代表の紹介のみで、スピーチは受けないとのことでしたが、山田会長からのメッセージおよび日本山岳会か

らの贈り物を預っているのです、是非に
と南ア山岳会にお願ひ致し、各国代表
の紹介の後、日本山岳会のみが、スピー
チを行う榮譽を受けました。

南極観測隊に対する南ア山岳会の友
情にふれられた山田会長のメッセー
ジは、出席者全員に感動を与え、且つ「名
前は忘れたけれど、背の低い、丸い顔
の日本山岳会のメンバーと、テーブル
・マウンテンの岩を登った」と涙ぐみ
ながら三十年前を思い出す年輩のメ
ンバーも何人かおられました。

南ア山岳会ポール・ファッティ
(Paul Fatti) 会長からは、日本山岳
会からの贈り物「ブラーグ」の紹介も
あり、両国山岳会の友情の再認識、お



筆者(左)とケープタウン大学名誉教授 MR. ERIC AXELSON

よび今後の両国の交流にとって大きな
意義のあるパーティーでした。

昨年までは、観光ビザで日本を訪問
することが、出来ませんでした。今
年からは観光ビザによる日本訪問も、
全く自由になりましたので、今後、日
本を訪れる南ア山岳会のメンバーも出
てくることと思われました。

また是非、日本山岳会のメンバーも
南アにやってきて、南アの山をエン
ジョイして下さいとのことでした。

私が南アに駐在しております間は、
出来る限り仲介の労をとり、両会およ
び両国の友好のために、少しでもお役
にたちたいと思えますので、遠慮なく
お申し付け下さい。(九一・九・三三記)



“ブラーグ”

(K. SAKAMOTO, C/O Marubeni
Corporation Johannesburg Branch
P.O. BOX 784648, SANDTON 2146
R.S.A.)



ヒマラヤの

エーデルワイス探訪記

坂倉登喜子

雨期のヒマラヤにエーデルワイスが
咲くと言うことで、シャンポチェにあ
るエベレスト・ビュー・ホテルの宮原
社長から、ホテル周辺にエーデルワ
イスの群落があるから、是非エーデル
イス・クラブの人達に見に来て欲しい
と誘われて、朝日のタイトル「エーデ
ルワイスに魅せられた八十歳の青春」
と発表され、私達は去年のブータン花
のトレッキングに引き続き、今年の夏は
再びヒマラヤ・シャンポチェ・花のト
レッキングを計画して、去る七月十五
日成田を出発、空路カトマンズに着い
た中高年女性ばかり十一名の一行は、

宮原社長の出迎えを受けて、カトマン
ズの立派なホテル、ヒマラヤに着いた。
荷物の延着で急拠宮原氏の手配で、
ナムチェまでヘリで飛び、降りた所が
お花畑の真只中、ふと草原を探すと先
づ十本の大きくてすてきなエーデルワ
イスを私が発見、「エーデルワイスが見
つけた！」と叫んで、皆を呼び花を
囲んで、一斉に四方から接写した。

その日はナムチェのロッジ泊り、翌
日は花のエベレスト街道を歩き、途中
アマダブラムの見える地点のアマダブ
ラム・ロッジで一泊、ここで松田他二
人のゴキョ組と別れて、私達八名は
宮原氏と共に、シャンポチェのエベレ
スト・ビュー・ホテルまで登った。
三八八〇呎の富士山より高い所に建
つホテルは雨期で休業中のところ、特
に私達のために開いて下さって、静か
な山のホテルでの最高の宿りとなった。

食堂の大きなガラス窓からは、アマ
ダブラム、ロツツエ、エベレストとワ
イドの展望が見事だ。私は前にランタ
ン・トレッキングの折泊って、タンポ
チェの僧院まで往復したことがあって
二度目だったが、他のメンバーはすて
きなキャンドル・サービスの夕食の雰
囲気に酔っていたようであった。

翌日ホテルから宮原さんの案内で四
〇〇〇呎近い所まで登って、エーデル
ワイスの群落地に私達が初めて足を踏

み入れた。そしてあまりの沢山の花群れに驚きながら、咲き始めたばかりの若い花を探して夢中で接写した。

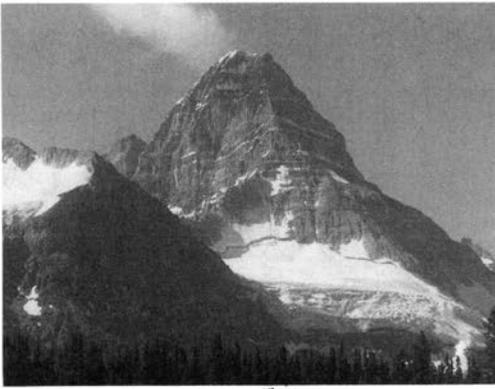
そしてその翌日も早朝から反対側の花園を、更に出発日の朝も心ひかれて花との別れを惜しみ、シヤンボチェから、迎えのヘリでカトマンズに戻った。

ゴークョ組は更に五三〇〇呎のゴークョピークに登り、目的を果し雨期の花の旅を全員無事終わった。受入が可能なら、雨期の花の旅は最高だと思ふ。

カナデアン・ロッキーに登る(1)

原 謙一

カナダ山岳会主催のアシニポイン



アシニポイン

キャンプへ会員の荒木氏と参加し、ハイキングなどを楽しんで来ました。アシニポインはバンフの南約四十キロに位置し、アルバータ州のバンフナシヨナルパークとブリティッシュコロンビア州のアシニポイン・ロビンシャルパークの分水嶺にまたがっている山です。ハイキングを楽しむ地域は殆どがコロンビア州に属していて、そこには州立の設備がいろいろ設けられてあります。二十人位宿泊出来る管理人付きロッジが一軒、四、五人用バンガローが数棟あります。またキャンプ指定地はグルーブ用と個人用が各一個所別々の所にあり、我々はグルーブ用ヘントを張りました。

この地域へ入るには車の終点から一日で入ることが出来るいくつかのコースがあります。マウンテンバイクや馬で入ることも出来、従って馬専用のキャンプ場も設けられてあります。全ての設備が美しい森と氷河、湖と花に恵まれた標高二千呎位のアルペンメドウのなかにあります。その他にアシニポインの途中二千七百呎の所に十二人位泊れる避難小屋が一軒あります。飲用水、洗面などは全て川の水を使用しています。排水は全て穴を掘って地中に浸透させて、決して川へは捨てないようにしています。テントは三日目毎に場所を移し、植物を傷めないよう

にして非常に自然保護の面で気を使っています。

自然の動物も非常に多く、朝夕はテントの周りに鹿が出て来て草を食べていたり、可愛いリスが愛嬌をふりまいてテントの周りで遊んでいる風景などもみられます。ビイバアの巢のある湖もありました。熊も多いので夜はテントのなかへ食料を入れておくと危険なため、外の立木の高い所にワイヤーロープで吊すような設備も出来ています。

〔短歌〕

アムネマチンの周囲

伊佐九三四郎

神生れぬアムネマチンの白き山雪山郷に秋しのびよる朝
くりかへす白酒の乾杯とめどなく雪山郷の夜は長くて
悠然と空舞ふヒマラヤハゲワシの眼下遙かに鳥葬の台
放牧の天幕風にはためきて犂牛追ふ人の声千切れけり
手を振れるチベット族の子ら愛し羊追ひつゝ山下りくる
昏れなすむアムネマチンの草原に仄白く流る羊群の声

― 続く ―

ナキウサギ穴よりいでて穴に入る草原の人氣一人占めして
無造作に電柱にとまれるオオノスリ
バードウォッチャーの歎びの声
極楽は湯舟に手足伸ばす時温泉の町
午後のひととき
黄一色シオガマギク咲く峠路に突如降りくる雹の一団
菜の花の咲けるがごとく川筋を埋みつくしてシオガマギク咲く
標高の五〇〇〇に近き丘なればマイク
口もあえぐ青蔵の旅
中国のなかの異国とわれ思ふチベット族の寺に詣でる
中国の言葉使へど羊追ふチベット族は遊牧の民
ここはもう別の国よと語りあふ青蔵高原
原晩き夕暮
文明の灯眺めたることもなき民の頭上に大いなる空

昭和天皇、環境行政へのご関心

田畑 真一

平成三年七月七日付け『読売新聞』に「昭和天皇環境行政強いご関心」の見出しのもと「環境問題に強い関心を持っていた昭和天皇は、昭和四十六年の環境庁発足について『遅まきながらできた』と発言されたことがあったと

いう」という記事が載った。生物学者としても著書・論文があまりになつた昭和天皇であれば、なるほど私は痛感した。

一脈通じ合う話がある。平成三年五月二十三日、私は鯨岡兵輔元環境庁長官から、昭和天皇が環境問題にご関心が深かったことを直接おうかがいする好機をもった。鯨岡元長官は昭和十一年七月、当時学生であつた頃、南アルプスの村・芦安村の山案内人であつた青木正一氏の案内を受け、北岳(三一九二)などへ登山。五十五年ぶりの鯨岡氏と青木氏との再会場面においてである。鯨岡氏は述べられた。環境庁長官時代、天皇陛下に二度お声がかかり、単独で皇居へ参上した。

陛下は「自然というものは非常に大事なものだ。それがないと人間は生きていけない。しかし、人間が近寄れない自然では意味がない。ヒマラヤとかそういう自然では意味がない。人が近寄りすぎると、人がどんどん行って、自然をこわしてしまふ。ここが非常に難しいところだけれども、あなたはそれをどういう考えでやっているのか」と尋ねられた。鯨岡氏は、これは難問だと感じられたという。しかし、まことに適切なお尋ねだとも痛感されたという。どうお答えしたかは忘れてしまったが、お尋ねの内容だけは、今も

はつきり覚えていられるとのこと、前記の通りである。

ゴーキョピークに登る

松田柳子

大型ヘリコプターでナムチェの丘(三五〇)に降りたのは七月十八日。「草原で暫く休んで」という宮原氏の声に、皆一旦は横になったものの囲りの花が気になって、すぐ立ち歩いてしまふ。早速大輪のエーデルワイス(Leontopodium Stracheyi)が見つかった。その夜は三四〇のナムチェバザールに下つて泊り、翌日はアマダブラム・ロッジ(三五〇)に泊つた。

エベレストビュー・ホテルに向う仲間と分れて三人はアマダブラムを間近に見ながらモン・ラ(三九九三)に向う。ここからは急坂をポルツェタンガまで下る。翌朝子供が二人キノコを持つてきてくれた。クムジュンの学校へ行く途中だという。樹林帯の急登が続き、巨大な滝が幾すじも現れてきた。やがてキンポウゲがビッシリ咲いているドレー集落に着いた。サーダーの家の隣の草原にテントを張る。朝、雲が去つてタムセルク、カンテガがドウド

コシをはさんで間近に見え、はるか下に建設中のタンポチェの僧院が見下せられた。

丘に登るとチョルテンがあり、チーオエーの白い頂が見えた。ラパルマ、ルザの集落を通り、マツツェルモに着く。各家が石囲いをして牧草を植えているので黄色や紫の花でモザイクのようだ。天候のパターンは、午後から小雨、夜半降り、朝は晴れ。モンスン中というのに雨具は一回着けただけだった。マツツェルモを出て暫く行くとヤクの放牧地、ここは足の踏み場もない程エーデルワイス(J. jacobinum)がビッシリ咲いていた。この辺りはゴジュンバ氷河の末端、モレーン丘がドウドコシを二分している。道の左上にブルーポピーを見つけた。霧に濡れてひときわあざやかだった。やがて沢を渡り、水流を遡ると空色のポカリ(湖)に出た。水辺に黄色いサクラソウが群生していて美しい。二つ目の湖で休んでいる時に、純白の綿毛に包まれたエーデルワイス(J. monocephal)が見つかった。予期していなかっただけに嬉しかった。三つ目の湖が現れてようやくゴーキョ(四七五〇)に着いた。石囲いの牧草地を持った家が七軒あった。

翌二十四日、ゴーキョピーク(五三六〇)に向つた。頂上近くになって黄

色いエーデルワイス(J. Evans)が見つかった。地面から咲いているかのように丈が低く、花は二マ程綿毛がふかふかしている。道の縁が黄色く見える程沢山咲いていて導かれる様に頂上立った。雲に閉ざされて山は見えなかつたが、四種類のエーデルワイスに出会えた訳である。

マッキンリーの烈風

科学研究委員会 大蔵喜福

極北のマッキンリー(六一九四)は世界の高峰のなかでとびぬけて低温と強風にみまわれる山である。そして数多くの登山家の命を奪つた山でもある。一九三二年より九〇年までに七〇四九名の登頂者があるが、遭難死亡者の数も六四名を数える。冬の登頂に限ると極めて少なく、登頂後生還した者となると十一名のみである。

酷烈なこの山の風を探りたいと考え山頂付近五七〇地点に気象観測機器を設置したのが昨年の六月十七日であった。一年間の風速、風向、気温などの自動観測が可能なのか一抹の不安は残つたが、第一歩を踏み出した喜びは大きかつた。本年八月二十六日、データ回収のため設置点に再び到達したが、センサーは倒壊していた。国立公

園の要望とはいえ固定方法が甘く、惨たんたる姿をさらしていたのだった。失意の中を記録装置を回収。登山活動を終了し、来年再々度の設置許可を国立公園局に申請し設置方法もより強固にすることで内々の承諾を得てきた。

帰国後、記録装置が無事働いてくれたことがわかり望外の喜びとなったが、肝心の冬の風の強さを測ることができなかった。倒壊は昨年十一月二十二日、それまでの最大風速は約七〇㍉/秒。雪の付着、結氷そのほか劣悪な気象環境下における風圧がワイヤーを切り、支柱を倒壊させたと想像できた。その風は平地換算すると約五二㍉/秒、そのパワーは超大型台風並みである。切れた二本のワイヤーも回収した。帰国後の調べでは突風によるあらゆる方向からの衝撃荷重の繰り返しと、さらに疲労破壊などの要因が重な



支柱とセンサーの倒壊
そのセンサーはバック

り破断に至ったと結論づけられた。要は設置法を改善することで解決するということである。来年の設置には四本足の支柱土台を岩盤に直接ボルトで止める方法を用いるつもりである。
冬のマッキンリーの風は直接現地での観測は全くない。ゾンデ等の高層気象データ、西方マグラスと東方アンカレッジ気象台でのものを調べると頂上付近五〇〇㍉、パール自由気流では、約八〇㍉/秒ほどの風が最大である。冬になる前に七〇㍉近い風があったことは実に驚きで、真冬の酷烈な風と寒気は想像を絶し、計り知れないものと思われる。
なお幸いなことに年間計測できた気温は、二月三日午前七時にマイナス七二度Cが記録され、十一月より二月中旬までに六〇度C以下の日が数十日あったのに注目したい。

しかし、生データのままで正確さに欠け、補正分析が必要のため、解析に時間がかかりまだ正確な記録として発表できないが、いずれその機会がくると思う。
一応第一のステップが成功とはいえ、来年度からの展開について

は、今回の失敗を糧とし、設置法の改良、さらにトランスポート方式で一〇〇キ離れたタルキートナより指令でデータを直送する方式を加え、リアルタイムでのデータを入手するシステムを確立したいと考えている。さらに観測機器に必要なエネルギー供給の研究も進めているところだ。

現在、科学研究委員会をはじめ、多くの協力者を得てプロジェクトチームを組み、鋭意進行中であるが、今後は多額の費用捻出と共に、いずれヒマラヤ地域への展開も見据えて、東海支部グループとの協力など大仕事となりそうである。山岳会各位のご協力を切にお願い申し上げます。

『印度測量局記録集成』 第五卷

— 本誌九月号の記事補正 —

雁部貞夫

フィリモアの編んだこの大著につき、九月号で記した中で、畏友葉師義美氏から、ご注意いただいた点を中心に、拙文を補訂しておきたい。

第五巻を所蔵している日本人はいないと思われる、と私が記したのは、いささか勇み足の観があり、葉師さんによると、あるヒマラヤ研究者がいち早く入手していた。なお、この巻の発行

ナムチャ登山
山研 改築 合同募金に協力を!

は一九六八年であり、私が一九六〇年と書いたのは、明かに誤記である。ウォーラーの『バンディット列伝』(90)にも一九六八年発行と書いてある。

九山山房にも、その他のヒマラヤ研究者諸氏の文庫にも第五巻を欠く四冊セットが所蔵されていた例が多いので、前記の第五巻所蔵の例は極めて稀だと思われる。葉師さんも「どのように入手したのでしょうか？」と私宛書信でもらされている。これは多分、私の推測にすぎないが、その方は、デーラ・ドゥンの印度測量局と直接交渉されたのではなからうか。海外古書店のリストに第五巻が記載されていることは先ずないと言ってよい。

ともあれ、この曲物が私によく知る方の手許にあったというのであるから、燈台下くらしとは、このことであつた。近いうちにぜひこの本に對面したものである。

私の手許にも四冊セットがあり、その第一巻はインド測量局長官からシムラ在住のH・バロック准将への献呈本であつた。これらの貴重本を割愛して下さった本会大先輩のご好意に感謝して、この稿を終えたい。

書籍・雑誌 受入れ報告 1991年9月

著者	書名/雑誌名	版型・ページ	出版元	出版年	寄贈/購入別
志田忠儀・西澤信雄	朝日連峰の狩人	B 6/237 pp	山と溪谷社	1991	発行者寄贈
五百沢智也	自然景観の読み方 9 地図を読む	B 6/196 pp	岩波書店	1991	発行者寄贈
とよた時	イラスト丹沢・山ものがたり	200×150/158 pp	山と溪谷社	1991	発行者寄贈
西堀栄三郎選集編集委員会編	人生にロマンを求めて 西堀栄三郎追悼	四六版/480 pp	悠々社	1991	発行者寄贈
日本ヒマラヤ協会監修	ヒマラヤへの挑戦 1	B 5/338 pp	アテネ書房	1991	発行者寄贈
日本ヒマラヤ協会監修	ヒマラヤへの挑戦 2	B 5/322 pp	アテネ書房	1991	発行者寄贈
日本ヒマラヤ協会監修	ヒマラヤへの挑戦 3	B 5/336 pp	アテネ書房	1991	発行者寄贈
ケルン編集室編	ケルン 復刻版 1933.6~1938.5	226×157 10 巻	アテネ書房	1991	発行者寄贈
アテネ書房編	ケルン 復刻版解題	226×157/169 pp	アテネ書房	1991	発行者寄贈
関西徒歩会編	ペデスツリヤン 復刻版	226×157/243 pp	アテネ書房	1991	発行者寄贈
国立天文台編	理科年表 1991・第 64 冊	A 5/1048 pp	丸善	1991	発行者寄贈
慶佐次盛一	兵庫丹波の山 (上)	四六版/208 pp	ナカニシヤ出版	1991	発行者寄贈
ガストン・レビュファ	モンブラン山群特選 100 コース	265×230/247 pp	山と溪谷社	1981	購入
菅原達也	山岳俳句集 登攀者	四六版/189 pp	菅原達也	1991	著者寄贈
「幹ちゃんを偲ぶ」刊行の会編	幹ちゃんを偲ぶ 後藤幹次追悼集	A 5/248 pp	同刊行の会	1991	発行者寄贈
黒沢和士雄	歌集 けものみち	四六版/167 pp	黒沢和士雄	1991	著者寄贈
Jan Babicz	Peaks and Passes of The GARHWAL HIMALAYA	200×140/246 pp	CORDEE	1990	購入
M. Kelesy	Guide to the WORLDS MOUNTAINS	214×140/928 pp	KELESY	1990	購入
J. Waterman	HIGH ALASKA	260×185/398 pp	AAC	1989	購入
AC of Canada	Canadian Alpine Journal INDEX 1907-1987	215×280/113 pp	ACC	1988	購入
A. Selters	Glacier Travel and Crevasse Rescue	210×135/159 pp	MOUNTAINEER	1990	購入
C. S. Houston	GOING HIGHER Rev. ed.	215×148/324 pp	LOTTLEBROWN	1987	購入
S. Mehta, H. Kapadia	Exploring the HIDDEN HIMALAYA	240×165/172 pp	HODDER &	1990	購入
S. Vanables	PAINTED MOUNTAINS	240×160/239 pp	HODDER &	1986	購入
R. Messner	FREE SPIRIT	252×177/250 pp	MOUNTAINEER	1991	購入
W. Unsworth	EVEREST	240×160/704 pp	CLOUD CAP	1989	購入

日本山岳会所蔵山岳地図目録

A官製 B個人、団体 aシリーズ b単作 c付録 d概念図 eその他

分類番号	発行者	発行年	地図名	縮尺
B 1-1 d	British Trans-Arctic Exped	1970 ?	THE ARCTIC OCEAN	1 : 10,000,00
A 1-2 a	デンマーク政府	1000	WEST COAST OF GREENLAND	1 : 2,500,000
	do.	2000	EAST COAST OF GREENLAND	do.
	do.	2300	KAP GUSTAV HOLM	1 : 400,000
	do.	2400	KAP G. H.-KAP VEDEL	do.
	do.	2500	KAP GARDE-SCORESBYSUND	do.
	do.	2600	KAP BREWSTER-KAP SIMPSON	do.
	do.	2701	KAP SIMPON-HOLD WITH HOPE	1 : 250,000
	do.	2702	HOLD WITH HOPE-SHANNON	do.
	do.	2801	SHANNON-SKAERFJORDEN	do.
B 1-2 b	M. Fauntain	1969	GROENLANDIA	1 : 5,000,000
A 1-3 a	アイスランド政府	1944	UPPDATTUR ISLANDS	1 : 100,000
B 1-6 b	American Geographical Society	1965	ANTARCTICA	1 : 5,000,000
A !-6 b	国立極地研究所	1957	オングル島	1 : 5,000
A 1-6 a	U. S. Dept. Interior Geog. Survey	1960	Mt. SIDNEY	1 : 250,000
	do.	1962	VINSON MASSIF	do.
	do.	1965	ROSS ISLAND	do.
	do.	1959	THIEL MOUNTAINS	do.
B 1-6 d	極地研究振興会	1965	南極大陸	1 : 6,500,000

図書室だより (3)

▼各国山岳会の年報が届き始めました。毎年最も早いのはアメリカ山岳会のAAJです。

巻頭には難攻不落のローツェ南壁を単独で四十六時間という驚異的スピードで登って降りたトモ・チェセンの記録。続くシシヤパンマとチヨオユーは易しい八〇〇〇ですが、最先端を行くクルティカ、ロレタン、トロワイエの三人はこの両山を新ルートからそれぞれ一日ないし三日で登っています。

K2北面には同時期に横浜隊も登っています。横浜隊は途中でルートを変更したので、ここに記録を寄せたアメリカ・オーストラリア隊の北稜ルートを使用する許可を得る必要があった。パキスタン側は言うに及ばず中国側も混み合っています。

エベレスト清掃登山隊は、六週間で一トン以上のゴミを集めている。これと関連させてヒマラヤン・クラブのT・ブラハムが、「二十年後のヒマラヤ」と題する提言を寄せ、ボニントンがナングパルバットのゴミの惨状を書いています。

地元アラスカではローガン峰のハミングバードリッジとフォーレーカーの新ルート。

▼次は南アフリカ山岳会の年報。年報は一般に前年の記録を発行年で表示しますが、南ア山岳会年報では一九九〇年是一九九〇年と表示する習慣です。本年で創立百周年を迎えた南ア山岳会の中心、ケープタウンセクションでは記念行事の準備がなされている。南極、パタゴニア、ボリビアへの遠征の計画、南ア中の一〇〇〇山に登る計画、一〇〇〇年史編纂など。現在南アの政治状況は変わりつつありますが、この雑誌には登山とクラブ内の事柄が淡々と記録されているだけです。

▼「山岳地図」については、松田雄一副会長がかつて会報二七〇号(一九六七年十二月)に丸善の即売会で一括購入した旨を書かれ、リストが掲載されています。この一三四枚をベースに少しずつ集め、現在は三〇〇枚を越えております。今後も珍しい地域の地図は極力集めていきたいと考えております。

「山岳地図」という言葉は定着したものではありませんが、平地ではなく山地、山岳地帯の地図という意味の他に、特定の山について作られた地図類の総称として使うことに致します。

▼以下に日本山岳会所蔵の海外の「山岳地図」リストを順次掲載致します。

この他に北極海の島々、南極海の

島々、カナダ北極圏を順次揃える準備をしております。
また、地図はリストだけでは位置が分からないため、インデックス地図も用意することになります。



死のクレバス

アンデス水壁の遭難

J・シンプソン著

信じ難い山からの生還物語である。

一九八五年六月ペルーアンデス・シウラグラランデ峰六三五六が、西壁一四〇〇の氷壁を初登攀に成功後、天候悪化の悪条件をついて下山途中著者が右足骨折の重傷を負い、最悪の状態のなかであらゆる努力を試み、懸垂下降を続けるうちにオーバーハングの壁から宙吊りになり、遂にパートナーによってザイルが切断され、クレバスに墜落。奇蹟的にブリッジに止って助かる。

翌朝、パートナーは好天気恵まれて下山、ザイル切断現場で何が起った

のか確め生存の可能性なしと判断、ベースキャンプに一人生還する。
著者は死の予感から、生の喜び、絶望と孤独にさいなまれながら超人的な努力で、ベースキャンプに文字通り這い下り生還をはたし、ザイル切断が結果として二人の命を救ったことになった。

「ベースキャンプ……世間からひどくかけ離れた感じだが気分はいい。アルプスよりずっといい。」

登山者の群れも、ヘリコプターも、救助隊もないし山とわれわれだけ……

未踏の水壁に予想以上に苦められ、登頂に成功するが困難な下山ルートで右足骨折の危機に直面、非日常の極限にあつて、二人の恐怖、苦しみ、心の動揺が見事にとらえられている。

宙吊りになり対面する氷壁、足下のクレバス、ザイルが切られる予感、アツと思う短いしかも長い墜落。パートナーの極限までに追いつめられた末の、ザイル切断、その後の耐え難い罪悪感、打ちのめされた心、よもやの生還に驚きと喜び、そして気まずさが……
リマの病院で手術するが保険の確認FAXのため二日間待機させられたと言う。

原題は「Touching The Void」一九八八年出版。二人の極限状態における意識と肉体のドラマを内面からよく描いている。

一九九一年五月 岩波書店 二八〇頁 定価二〇〇〇円 (三沢 三)

ブータン王国 自然調査団報告

富山県自然保護協会
日本山岳会富山支部

在りし日のわが国の田舎風景が今日のブータンにあり、心がやすらぐ思いがする。この報告書は一九九〇年九月に二週間、右記の合同隊が一般班とトレッキング班に分かれて西部ブータンの自然、文化、歴史等多岐にわたって調査した報告書である。

「調査記録」ブータン見たまま「資料」の三編から成っている。

調査記録 (一)一般班は成田・デリー空港での手荷物トラブル、パロ、テンブー、プナカ等ブータンの街の様子やゾン、チオルテン、寺院名所旧跡、ブータンの国民性を述べている。(二)トレッキング班の記録も時間刻みの記録で今後のトレッカーに役立つが、中国型の旅行方式のためお仕着せで自由気ままに行動できていない様だ。またこの期

間にモンズーンが明けなかったために好天に恵まれずチョモラリーの高度四〇〇〇呎のベースキャンプで二泊しているが、山も見えず悪天候と疲労・高山病で苦勞した様子がうかがえる。(三)西岡京治氏(二十五年間農業指導をしている)が語るブータンの農業では、農業・林業の現状が報告されている。ブータン見たまま 社会生活、民生、服装、建物、薬、植生について隊員がそれぞれの専門分野あるいは興味ある分野について記している。

富山県は立山・剱といった山岳国立公園を擁しているだけに自然保護に関心を示しているが、ブータン政府は海外からの観光客が国家収入源として大きくなることを知りつつも、国内資源とバランスをとりながらビザ発給をコントロールしている実情や、森林は全て国有林で住民は枯木しか勝手に拾うことができない堅実なブータンの現状を伝えている。

資料 「環境と持続可能な開発について」のパロ判決九〇年五月五日付で、この堅実なブータン国家の永続的な幸福と発展への決意を知ることができ。パロ、テンブーの高所からインドとの国境の街ブンツォリンに下りてくると、ブータンは雲の上の天国、このままそっとしておきたい国である。

中国登山の手引 日本ヒマラヤ協会刊

一九九一年三月 一〇九頁 非売品 (田中 外治)

「H A J」が中国を目指したのは、一九八三年である。それ以来七年間に二四隊(内、中国との合同登山は四隊)の登山・踏査隊を派遣し、この渉外を兼ねて数多くの代表団が訪中し、情報を収集すると同時に親善交流に努めてきた」と、はじめにの挨拶にみられる様に、この手引書は中国登山についてのH A Jの実績を集大成したものである。

第一部では、まず、日本隊の活躍を中心とした中国の代表的な山についての登山概要が記され、続いてこの書の主題である登山手続きが、初めて中国登山を志す岳人にも分かるように、懇切丁寧に書かれている。中国登山では、ネパールやパキスタンの登山と違って、登山隊が中国登山協会(一部では、西藏登山協会、新疆登山協会等でも可)へ直接登山申請をし、それが許可された段階で登山科の支払い、議定書の調印、隊貨の発送、登山隊の出發と進行するが、この間にあれこれと質問や確認を文書でおこなっても、

CM Aから打てば響くような回答が来ることはまずない。(特殊関係者を通しておこなえば早速返事が届くが。)このような場合の交渉の進め方についても多くの事例を通して説明がされている。

第二部の「中国の山と地図」の箇所では、第一部に紹介された山の中で、未知・未踏な山々が写真とウィットに富んだ解説をつけて説明されている。第三部の「中国登山の資料」では、H A Jが登山した色々な山域の気象データが掲載されている。メンルンツェ(七一七五呎)の登山を計画する隊にとってラプチェ・カンのデータが直ぐ役立つように、これから出かける登山隊にとって貴重な資料となる。

第四部の「中国登山史と文献」では、一七二五年からの中国登山の主要年譜や西藏登山和文参考資料がかなり詳細に記されている。わが国における海外登山情報センターの役割を果しているH A Jの資料収集とその整理分析能力の高さが伺える箇所である。中国登山を志す岳人にとって、全体の知識を素早く把握するには最適の手引書である。

一九九〇年三月三十一日初版 日本ヒマラヤ協会発行 B5版 二〇三頁 定価三〇〇〇円 (徳島和男)

名古屋からの山なみ

—東山スカイタワー基点—

日本山岳会東海支部編

本書は日本山岳会東海支部創立三十周年を記念して、沖充人氏を編集委員代表に、十一人の方々を委員にたずさわられ、四十五名の執筆者に加え、他に多数の写真を提供された人達により編まれた労作である。

本文は二つの部分、即ち東山スカイタワーから見て「北の山から東の山々へ」と「南の山から西の山々へ」からなり、位山から蔵王山へ六十座と鍋山から尾張富士へ五十一座についての紀行、随想、研究集で、A五版、二百七十五頁＋年表十一頁にまとめられている。巻末には、安藤忠夫氏の研究である「名古屋から見える山、見えない山」と「日本山岳会東海支部三十年の歩み」を年表にまとめ、付されている。各山の項目が二、三頁にわりつけられ、本文上部に写真と、交通、所要時間、コースなどの小さなガイドがもうけられている。富士山、北岳、白山、

など、世にいわれる名山の項よりも、寧北曾岳、京丸山など地域に密着した山に行数が多くとられており、中でも大台ヶ原山や池木屋山についてが最長の文章であるのも面白い。

「登った、降りた。」の水くさい文章の多い最近の山岳書の中にあつて、執筆各人の「山に馳せる熱い思い」と「文学的香りの高い内容」がかなり満たされた一書となっている。また巷にあふれる「○○百山」のひそみに倣らわす百十一山の選択にも好感がもてる。

ところどころ頁の下隅に、筒井稔氏のカットが埋め込まれているのも、やや小さいとはいえ、楽しいものである。東海支部といえは、海外登山を活動の中心とした先鋭的な支部と受け止められ易い中であつて、山を書き、山を描く人達の多くあることが支部の活発な活動源の一つとなつていたのである。

「名古屋から見える山、見えない山」は副書名にある東山スカイタワーを展望地点として、山岳展望をはかった研究である。また本書の表紙をかざる題字は、石

次代に残そう美しい山と溪

岡繁雄氏の筆によるものである。

一九九一年六月 A5版 日本山岳会 東海支部刊 二七五頁 領価二〇〇〇円 (柏木宏信)

すぐに役立つ「山の絵の描き方」スケッチから油絵まで

山里寿男著

初心者への為の

「淡彩・山の描き方」

牧潤一著

それこそ、「飽かず山を眺める」このたたずまいは、山のスケッチならずとも山を愛する岳人と至福のひと時として共感ある姿と言えましょう。光や音や水や空気、遠く近く山々の連なり、そして周りの全ては快い刺激として全身を振るわせて来ます。いったいこの感動をどう表現すれば良いのでしょうか。両書の共通して語るところはこの問に対する一つの明解な解答であると言えましょう。私も当会のアルパインスケッチクラブに参加し、山登りのかたわらにスケッチを楽しんでいます。数年前海気なく手にした山里寿男さんのスケッチ入門書や「岳人」での「山の絵を描こう」に動機の幾分かがあったように思います。今回の「山の絵の描き方」はこの延長線上にある訳ですが、豊富なカラーは一段と美しくなり、技法紹介もより一層楽しく解り

易くなっています。水彩・パステル・油とあれこれ手を広げる私にはとても嬉しいことです。また画帳をリュックに入れて出湯の旅・スケッチにいい場所を探す等は読み物としても楽しいしなによりも有難い情報です。

牧潤一さんの絵は長いこと「岳人」に連載されてきましたので、ご存知の方も多くいらっしゃると思います。表紙はもちろんのことページを捲る毎に清涼感・透明感溢れる独特の印象的な絵が目飛び込んで来ます。そして氏の特徴的な淡彩技法の示すところは個性豊かで貴重なソフトノウハウの提供でもあり、さらに納得の行くところでしょう。またあとがきで著者ご自身語っていらっしやいますが、山の骨格を掴むとか、山の絵を描く心等基本に帰って触れているところはとても説得力があります。

さあ！ それでは山に行きましょう。そして山に向いその感動をスケッチブックに納めてみましょう。上手い下手は問題じゃない、山をもっともっと楽しむことが出来ますよ。両著者が親しみを込めてそう熱く呼びかけて来ようです。

すぐに役立つ「山の絵の描き方」スケッチから油絵まで 東京新聞出版局 定価一八〇〇円

初心者への為の「淡彩・山の描き方」

日貿出版社 定価二二〇円

青年部報告

(斉藤幹雄)

ムスターグ・アタ山登山

相馬 勉

隊員未決定のまま五月連休に、劔岳周辺で有志による第一回強化合宿を始めとし、後、富士山、谷川岳で訓練山行を重ねた。七月六日、七日の両日、成蹊大学より合宿所をお借りし梱包作業を終え、七月二十一日、北京へと向かった。

北京より空路、ウルムチを経由し二十三日カシユガル入りをした。カシユガルに三日間滞在し、物資・食糧等の準備をし、また現地、カシユガル登山協会との最終打ち合せを行い、二十六日、カシユガルを出発し、スバシ(三六五〇呎)入りする。翌二十七日、スバシよりラクダ三頭に隊荷を積み込みBC(四三三〇呎)へとキャラバンを始めた。BCまでは数時間の行程であった。隊員六名、中国人連絡官一名、通訳一名と総勢八名の小規模な登山隊であり、隊荷は個人装備も含めて総重量五〇〇キロ以内にとった。

BC入山の翌日(二十八日)より、さっそく上部行動を開始した。BCか

【自然保護随想】

遊びの意識を変える

今年も五月連休は大学山岳会の梅池の小屋に入る。関西組は糸魚川から入り、日本海の魚を購入して小屋で刺身で一杯ということになる。

私たちの小屋は落倉の「風切り地蔵」から少し山手に入った所にある。冬は上からのコースになっているためにぎやかである。

五月四日、スキー組は車で出かけ、残った私と若者二人は鐘の鳴る丘まで歩いて登って読書でもしようということになった。私はザックにノートなどをに入れて二人とともに登る。空は青く、雪が現れるにしたがって空気も冷たく「脱、都会」の気分になる。

水もぬるみ、足元の雪の間の枯れた色の中にもさまざままな色合いの植物が現れていた。

第二ゲレンデに登り着いた頃、バリバリと音立てて二

台のヘリが低く飛んでいた。はじめは珍しかったが、あまりの騒音に腹がたつてくる。

小屋の影で本を開いていた二人も「先輩、読書という雰囲気と違いますな」という。

結局、スキー客を運ぶ二台のヘリの飛ぶ下でビールを飲むことになり、山がこんなにも騒がしいものであることを嘆き合っていた。私たちの仲間はあまり金を持っていないからヘリは使っていないはずである。

自然破壊は遊ぶ側の倫理観によって増大し、または、減少するものであることを知った日でもあった。

自然観の変更とか意識を変えようという現代、自然の中で遊ぶ時にできるだけ人工物を利用しないという原則を確立したいものである。平成四年から実施される「生活科」などで人工物のいらぬ遊びの論理を学習させてやりたいものである。

シーズンの終わりのスキー場は汚く惨めで、人間の心の荒廃であると思った。

(塚本珪一)

らC1予定地(五三八〇呎)までは、ほとんどガラ場で、遊牧民の踏み跡が続いており全く問題なく登れる。二十九日BCで全員休養の後、三十日C1

設置。C1上部七七八〇呎程セラック帯が続いており、その間をぬって行くような形で登る。セラックは安定しており、崩壊も激しくない。クレバスはところどころあるもののロープをつけてアンザイレンしてC2(五九〇〇呎)

まで登る、四〜五時間の行程である。C2下部一五〇呎付近より傾斜が緩くなり、大雪原がえんえんと続いて頂上に至っている。

八月六日、C2設置。C2付近より上部は、早朝を除いては雪がやわらかく、ツボ足だとヒザ下までのラッセルが強いられ、また、ヒドンクレバスも多少あるため、C2以上の行動はすべてスキー装着を原則とした。八月七日

定地(六四〇〇呎)までの偵察・高度順化をし、八日は全員BCに下り頂上アタック前の休養日とする。

翌九日、第一次アタック隊石川、佐々木がBC発C1入り。同日、田中、中里が荷上げを兼ねてアタック隊と共にC1入りする。十二日第一次アタック隊はC3を十時三十分に出発し、十七時頂上付近に到達したが、頂上周辺も大雪原でありどこが真の頂上か判断せず、三十分程周辺を歩き回り、一番

高いと思われるところに岩峰があった。そこを頂上と判断し、ケルンを積んでから下降を開始した。

第一次アタック隊は同日C2までスキーで下り、翌十三日B.C.に帰着。十三日にC3入りした第二次隊(相馬、田中)は、十四日十時三十分C3を出発、C3より三五〇経路登ったところで田中が不調を訴え動きが鈍くなったため登頂を断念しB.C.まで下降した。これですべての登山活動は終了し、十八日B.C.を撤収しカシユガルへと下山した。

参加者 相馬勉、石川慶英、滝沢守生、佐々木毅彦、田中清隆、中里雄一

四川省羊拱山に登る

宮城支部長 西郡光昭

宮城支部の会員十名、現地参加一名からなる中高年のパーティが去る八月、五二七三の羊拱山に登った。以下はその概略の報告である。

羊拱山は中華人民共和国四川省黒水県にある山で、成都の北東約三五〇キロに位置する。四川省にはこの程度の山はいくつもある中でこの山を選んだ理由は、アプローチが短かく未登ということだが、事前に得られる山の情報は

皆無であった。

前述した中高年登山者たるゆえんは、隊員の年齢が六十六歳を最高に六十代が四人(うち女性一名)、五十代四名、四十代一名、三十代二名という構成にあり、平均五十五歳三ヶ月ともなれば口数の多さにくらべて身体の動きは目立って低調になるうというもの。

登山隊の全日程は七月二十九日から二十三日間。まず仙台―大阪―上海―成都と飛び、ここで四川省登山協会から派遣された連絡官らと合流し、事前の打合わせと必要物質の調達を行ったのち山に向う。二日半の車の旅で黒水県三打古に着き、ここからさらに一日歩いて(隊荷は馬)、標高三四〇〇の地点にベース・キャンプ(以下B.C.)を作ったのが八月四日。

ここからが本格的な登山になるのだが、この頃から雨期の名残るか連日雨に降られ不愉快な山行となった。それでも三五〇〇にC1、四二〇〇にC2と進んだ八月十一日、隊員五名でC2を出発し、頂上を踏むことができた。羊拱山の山塊の上部はほとんどガラ場で構成されているといってもよく、それだけ頂上までにさしたる困難もなく、寒さに悩まされることもなかったのは幸いであった。登山終了後は、往路と同じルートで成都にもどり、北京経由では予定どおり帰国した。

五〇〇少々の山ではあったが、これを十日程度で、中高年で、ほとんどが初めての高度を経験しながら登るとなると、全員が揃って頂上をと願うべくして達せられるものではなかった。有名な四川省料理では隊員の多くが、早々に下痢で消耗し、回復までに時間がかかったり、高度の影響と思われる症状でB.C.で停滞を余儀なくされたりしたことは残念であった。

しかし、これを機に宮城支部全体に内外を問わず山行への意欲を大いに高まることを願うものである。(登山隊長は佐々木郁夫会員、山名はヤンゴンシャンと読む)

越後支部親睦登山

平成三年度は、大佐渡

山脈を舞台にして(1)

五月二十五日(土)から二十七日(月)まで二泊三日の日程で行われた。参加者は総勢四十一名で、氏名、コース(A―金北山、B―ドンドン山)の内訳は本文末尾(次号)に記した通りである。この登山会は従来から新潟県外在住の会員にも人気があり、毎年かなりの参加者があるが、今回も埼玉、東京、神奈川、静岡それに九州からも会員が見えた。初日はむし暑く、真夏を思わせる太

陽がキラキラ輝いていた。午前十一時新潟市佐渡汽船ターミナルの二階で受け付けを開始、次々と旧知の顔ぶれが到着し、山の仲間意識が湧いてくる。『山』編集代表の小倉厚会員の姿も見た。待つこと暫し、定刻の正午五分過ぎに、私たちを乗せた「こさど丸」は、いまNHKテレビドラマ「君の名は」でリバイバルブームが高まる佐渡へ向け出航する。船内は七分の入り。その中で早速私たちは大部屋のフロアに円陣を囲み、まずビールで乾杯する。話が弾むにつれ酒やウイスキーもさし出され、ますます興が乗り、快い酔い心地に浸っている間に船は両津港に着いた。天気晴朗にして波穏かな二時間二十分の船旅の間中、私たちは時間のたつもの忘れていた。

埠頭わきの車道に待機していた民宿「滝本」出迎えのマイクロバス二台に分乗して、国仲平野の清水寺やその他の史蹟をめぐる、佐渡の歴史の古さがひしひしと肌身に感じとられる。再びバスは発車し、予定通り今宵の宿「滝本」に到着した。めいめいに事務局から純米酒北雪の二合ビンが配られ、割り当てられた部屋に入り、旅装を解き一休みして入浴をすませる。

午後七時から大広間で、山田智子会員の司会進行により懇親会が始まった。まず佐藤一米越後支部長が挨拶、

地元の仲川俊一会員(佐渡山岳会会長)が歓迎の挨拶を述べた後、待ちかねていた宴会に入る。それぞれ互いに杯を傾け交わし、歓談が弾み旧交を温めながら、宴漸く酣にさしかかるころ、当地青年団有志による相川音頭、佐渡おけさ、鬼太鼓などの郷土芸能が披露されると、並みいる山の猛者たちもその妙技の迫力に感嘆のあまり、しばし声も出なかった。だがそれが終わると割れんばかりの拍手が部屋中におこった。

一次会解散後も、めいめい部屋で夜が更けるまで、相手を求めて酒と話が続き、寝る時間も惜しいほどであった。二日目は一転して雨天となり、一足早い梅雨の到来を告げるような空模様となった。早朝から雨が本格的に降っている。どうも私たちの願いを、気紛れなお天氣の神様は聞き入れてくださらなかったようだ。

でも天下の日本山岳会員が、これしきの雨にめげてはいられない。起床、朝食をすませ、予定通り午前六時にマイクロボス二台に分乗して出かける。ラジオの天気予報は、今日の降水確率を四十%と告げている。

バスは雨に煙る海岸道路をひた走る。相川町博物館のわきから技能伝承所製錬工場の前を通り、スカイラインを北上して、佐渡金山の採掘跡の傍ら

にさしかかる。進行方向右側の車窓越しに散在して見える露天掘りの跡が、いまだに生々しい姿を曝して、江戸時代の全盛期の面影を残している。そのうちに雨はいつしか霧にかわり、ぐっしり濡れた草木が、重たそうな体を風に震わせて踊っている。そのなかで今を盛り咲き誇るレンゲツツジとウツギの花の明るい派手な赤系統の色が、周辺の緑とコントラストをなして、ひととき鮮かに目に映る。

車は白雲荘の前に着いたが、降りないでまた出かける。地元の藤井与嗣明会員が先発して、通行許可の手続きをすませておいた「防衛庁航空自衛隊の管理道路」に乗り入れる。「車輛通行は航空自衛隊佐渡分屯基地司令の許可が要る」との、物々しい標識が立っている。道路がところどころ舗装してないのはどういう訳か。雨が一層激しくなり、風も強まってきた。自衛隊レーダー基地の手前でバスを降り、風雨のなかを雨具に身を固めて歩き出すと、すぐ金北山頂に着いた。素朴に考えればおよそ山頂には似付かわしくない異様な建造物が立っているが、こゝは日米安全保障条約に基づく対ソ戦略の重要な電探基地になっていて、揺れ動く国際社会の力関係のなかで、日本がおかれている立場を象徴している。あいにく

の悪天で眺望はゼロ、一休みして出か

ける。―続く―

(筑木 力)

第15回

「あんころ餅と菓湯の会」

河野幾雄

山研は改築のため本年中に取壊しとなるので、山研と共に生れた本会もこの建て物としては最後のものになる。記念すべき第十五回である。

山研は昭和四十八年の十月に竣工式を行い。三田幸夫氏のテープカットから始まって、同夜の西糸屋における来賓招待の盛宴に終ったが、実際の開所は翌四十九年五月であった。

昭和五十一年九月に三水会の沼倉、折井、網倉氏等数名が「新しい山研を見よう」と集まった。それぞれの方が偶然にも皆「ゆであずき」の大缶をリュックの中から取り出したそうだ。

その席で本会の成立がきまった。翌五十二年九月十日第一回が開催された。参加者は以下の八名であった。

沼倉寛二郎、網倉志郎、折井健一、斎藤健治、伊藤信夫、関塚貞亨、高田眞哉、松本熊次郎。その時斎藤氏が発起人お三方の前へ進み出て「以後お酒も少量御許し下さるよう願上げ奉り候」とか何とか歌舞伎の所作をしたのでお



山研前にて

三方も苦が笑い、次回から酒が許可されたそう。第二回は参加者が急増して三十名となったが、以来この線で締切りになって今日に至っている。山研の定員は二十名だから毎回シラフザック組が出るという。

一年にたった一日の事ながら、十五年の経験の積み重ねは恐ろしい。松本の列車から始まって、松本の買出し先、タクシーに至るまで人と人との縁が繋がっていることを、初参加の私は始めて知って驚いた。列車は新宿発七時半の「あずさ三号」の自由席だが、これは千葉始発で秋葉原に停車する。今回も私は秋葉原で乗って席をとっておいで下さった方のお蔭で始めから座れた。新宿では一時間も早く行ったの

に長蛇の列がホームに溢れていた。

松本へ着くと買い出し組と食事組の二班に別れた。集合時間を打合せた上で我々老人組は飯田屋ホテル近くの蕎麦屋へ案内された。駅の近くで一番美味い店だという。次いで土産物屋へ行った。駅前大通りの角を左折してすぐのわさび漬屋で、うっかりすると見すす程の小さい店である。店は小さいが味は松本一の名店の由。皆さんが東京への土産をお買いになった。

集合時刻になったのでタクシー乗場へ行き買出し組と合流する。分乗して上高地へ出発したが、このタクシーが三水会御用の「名鉄」。荷物がどんなに多くても、夜中でも嫌な顔一つしない親切にほれこんで近年はこの会社ばかりだそうだ。幹事のお一人が帰りに挨拶に行かれたところを見ると人とのつながりも浅くはないようだ。

夜の宴会は例によって会員の手作り料理で山海の珍味佳肴が並ぶ。圧巻は浅利の味噌汁。差入れて下さったのは菊地文雄さん。くるとき大きなクレーラーボックスを重そうにさげて歩いていて方があったが、その中味がこの大量の浅利であった。

翌日は流れ解散だが焼岳へ登る方が多かった。焼岳は昨年まで登山禁止であったが、本年から禁止がとかれ自由に頂上まで行けるようになった。

七日に頂上まで行ってきた愚弟が皆さんから質問されていた。弟は一人で徳本峠を越して帰京した。私は「初参加とはけしからん、会員の資格にも欠ける奴だ」という罪で止むなくこの記事を書く羽目になりました。

参加者 秋山光平、伊藤信夫、乾能尚、内山城、勝田房治、菊地文雄、久保孝一郎、河野幾雄、河野之保、小林碧、斎藤健治、坂倉登喜子、酒匂輝昌、妹尾幸雄・律子、高田眞哉、高橋早苗、滝沢ちよ子、田久保勇治、千葉保之、寺西邦夫、中村久美子、新村貞男、平井拓雄、平戸孝夫、宮原しづ子

三水会山研集会

焼岳解禁

小林碧郎

猿の来て覗く宴や秋の暮

鐘ひびく露の名残りの秋あざみ

焼岳に日矢落しゆく野分雲

龍胆に火山灰の登路は萌えやすし

硫気噴く熔岩ひた攀ちて霧昏し

(九月七、八日)

会務報告

九月定例理事会

九月十二日(木) 十八時三十分

場所 本会会議室

出席者 山田会長、藤平、松田両副会

長、小倉、重広、大倉、大森、入沢、

小倉、穴田、石橋、藤井、南川、村井、

山口、伊丹各理事、中島監事、橋本、

西村、斎藤常任評議員、委任：飯野監

議事

1 ナムチャバルワ登山隊

* 九月五日 常任募金委員会、ナム

チャバルワ委員会・実行委員会、壮

行会を開催

* スポーツ振興基金として三〇〇万

円が交付された。

* 九月十二日 報道隊出発、九月十九

日 本隊出発

* BC入りは九月二十八日、登山活動

開始は十月一日、登頂予定は十一月

一日、帰国は十二月一日。

* 総指揮部はラサに置き、山田総隊長、

村木副総隊長が支援隊とともにラサ

へ来るまで重広隊長が委任状を持ち

総指揮部に入る。

* 読売事務所は年内は借りてあるが、

出発後はJACに置き、橋本、伊丹が担当。募金関係では、企業募金が

中沢光江、佐藤知恵子、会員募金は石橋理事と堀嘉余子の各氏が担当。

* 一月一日、NHKのスペシャル番組で放映予定。

2 支援トレッキング隊

* 十月十日と十月二十日にそれぞれ出

発。(注)十月十日は中止)

3 山岳研究所

* 九月九日 小倉他で松本土建に交渉

に行った。

* 九月三十日 自転車振興会に申請書

類提出予定。

4 HAT-J

* 環境庁、文部省、NHKの後援を得

られることになった。

* HAT-J主催 四団体共催(JAC、日山協、HAJ、労山)で、協

賛団体はヒマラヤ保全協会、WWF

J、日本自然保護協会、日本野生生

物研究センター、緑の地球防衛基金、

そして協力は日本航空。

* 十一月九日は挨拶と講演、十日はシ

ンポジウム、場所：昭和女子大

* シンポジウムは高所登山、トレッキ

ング、山岳観光の三つの分科会にわ

け、湯浅道男、小野有五、岡島成行

の三氏にチェアマンを、須藤建志、

坂下直枝、川喜田二郎、沼田真氏ら

にパネリストになっていただく。

* 十二、十三日は富山会議(責任者：藤平副会長)講演とエクスカージョ

ン。
 *九月十五、十六日に穂高吊尾根で清掃登山を実施予定。信濃支部五名参加。

5 秩父宮記念学術賞の件
 6 名誉会員推薦の件

7 海外登山基金委員会委員交替の件
 各委員の任期は二年であるが、委員長は副会長が担当するので村木委員長は藤平副会長に交替。総務担当理事、財務担当理事もそれぞれ小倉(茂)、大倉に交替。他の委員は継続するが、来年で全員交替となることから、村木前副会長を改めて委員(任期二年)として加えたい旨を諮り、承認された。

8 九月二十八日の立山集会のシンポジウムのパネリストとして中高年対策に詳しい小倉童子氏を本部より派遣する旨を諮り、承認された。

9 登山推薦状発行の依頼
 *神奈川ヒマラヤ登山隊(広島三朗代表)のスパンティック峰と東京農業大学登山隊(白坂敬二郎代表)のガツシャールブルムII峰の推薦状発行の依頼があり、承認された。

10 その他の報告事項
 *京都支部ティリチミール登山隊は八月十五日登頂に成功。
 *笹川スポーツエイドに申請していた助成依頼は、一〇〇万円を交付されることになった。

*マンション外壁の改修工事中、九月より十一月末まで。
 *八月二十八日に物故された中山俊夫会員(三三三番)のご遺族より十萬円の寄付の申出があり合同募金への寄付とさせていただきますことにした。

11 各委員会報告
 青年部：ムスタグアタには二名が登頂した。

*南アフリカ山岳会一〇〇周年パーティーには現地在住の阪本公一会員に出席を依頼し、会からの記念品を贈った。

山研：八月までの利用者は四二五名、休業期もあったので利用は多い。十月十九日閉所。
 *閉鎖後、解体、建設の様子をビデオに撮影しておきたい。

科学：マッキンレーの気象調査は続けたい。機器を富士山でテストして改善したい。
 図書管理：武田満子、松永康子両氏より二万五千分一地形図二七四七枚の寄贈を受けた。

*会報に「図書だより」を復活させた。
 12 本日の入会承認者は広瀬学氏他五十名。

・ルーム日誌

(9月)

2日 総務委員会

3日 山研委員会、資料委員会

4日 青年部

5日 図書紹介

7日 ビアパーティ

9日 アルパインスキー

11日 図書委員会

12日 常務理事会、理事会

14日 土曜会スライド

17日 フィールド委員会、総務委員会

18日 三水会

19日 女性懇談会、科学研究委員会

24日 自然保護委員会、山研委員会

25日 岩登り準備会

26日 学生部

28日 ナムチャトレッキング説明会

30日 資料委員会

9月来室者 459名

職員異動

物故

徳永芳雄(四三三三) 9・4

森茂八(三七九一) 9・8

中山俊夫(三三三三) 8・28

春川正生(四九三五) 7・18

高見悦子(九五八七) 9・25

退会

野々村巖(八四七六)

山研・ナムチャ合同募金応募状況
 (十月七日現在)

(百口) 吉村健児、(六十口) 今西寿雄、(四十口) 西丸震哉、(二十口) 故中山俊夫、橋本龍太郎、山田秀介、(十口) 重廣恒夫、吉田満・三智子、大洞陽一、三谷統一郎、(八口) 高遠宏、片岡泰彦、(六口) 高見和成、早坂敬二郎、鳥居寿興、松浦輝夫、山本良子、木戸繁良、増江俊三、山本朋三郎、溝口洋三、坂本矩祥、小須田喜夫、鳴原啓佑、竹内孝、徳永篤司、細井澄子、丹部節雄、(五口) 小松原一郎、(四口) 酒井捷之助、高橋一雄、山田哲郎、前田清子、中沢仁、新谷明喜、牛木素吉郎、島田巽、高橋詢、中村純二、平林克敏、高田眞哉、古屋学而、近藤雅是、市川次良、池田剛、高澤英雄、西沢健一、(三口) 松本蟻ヶ崎高校山岳部OG会、崎田熙、岡本如矢、塩澤厚、(二口) 前田菊太郎、石田稔郎、小山睦子、宮原しづ子、貫田宗男、川合愛子、林邦明、先水美知子、遠藤光男、今井喜美子、船橋山百合の会、内藤俊夫、鷺尾顕、作見徹、三戸田一郎、宇津力雄、菅沼景子、角谷由利子、宮川清明、西村忠、小池英雄、小林晃、小寺佳美、奥田晃司、岡博三、千田武久、小池良吉、松沢君子、村松紀夫、安藤英弥、中島隆、

久野英一郎、関清、小川光則、石田幸次郎、鈴木丈司、相澤増平、谷川菊雄、佐藤貢、川上進、南井英弘、青木伸雄、相山之良、副島敏夫、羽賀克己、魚本定良、石垣政雄、高部正夫、田島汎、佐藤淳志、中西健一・光子、西村哲、阿部慎一、山本久子、武藤信子、大野紀和、柿原謙一、原田武司、小松久雄、山口政一、平林秀雄、尾身茂、内田玲子、遠藤靖彦、浜谷光安・多佳子、大澤勇、田久保勇治、原田幹市、南璋明、依田美恵子、大場撰雄、平山寛、熊谷藤子、熊谷正志、石田要久、高柳生雄、菅沢豊蔵、水沢富一郎、稻葉十四男、堤律子、(一口)徳島和男、宮島孝一、佐山邦彦、和田民子、近藤薫、中井俊一、三水会野美の市、寺本昭一、坂本美弥、子吉格郎、安藤昌宣、高田誠、一山了、(累計七百三十九名、二千八百四十三口、一千三百八十七万二千百九十九円)



☎ 3234-6659

この電話で
もお知らせ
しています

● 八方尾根懇親スキー山行

恒例の八方尾根懇親スキー山行を左

記要領で行います。今回は休日の関係で例年より少々期日がずれませんが、その点何時もよりゲレンデは空いているものと思われまます。ふるってご参加下さい。楽しい会にしたいと思います。

日時 一月十一日より十三日(二泊三日)

場所 八方尾根第一ケルン
八方池山荘に宿泊

費用 一万九千円(交通費昼食費別)

申込み JAC事務局まで会員番号、住所、電話、氏名明記の上ハガキにて申込みのこと。詳細送ります。

人数 四十名まで

集委員会(担当小松原)

●アルパイン・スケッチ・クラブ

第一回作品展のご案内

昨年来、同好会として活動を重ねて参りましたアンパイン・スケッチ・クラブがこの一年間の成果を発表する「第一回ASC展」を左記の通り開催致します。メンバー四十数名は初心者多数ですが、山登りのかたわらスケッチした感動をお伝え出来ればと思います。気楽な雰囲気のエキジションです。是非お立寄り頂きご高評を賜れば大変な励みになります。

期間 平成四年一月二十四日(金)↓二十

時間 八日(火)
午前十時三十分より午後六時

会場 東京電力電気温水器センター
ギャラリー(渋谷区道玄坂二

一六〇一六 ☎三三七七〇一六
一七一七)

●忘年会のお知らせ

日時 十二月十四日(土) 五時半

場所 JAC 集会室

会費 二千元

今年も年末が近づきました。一年の山行や、来年の計画など語り合ひましょう。

*一人五百円程度の品物をご用意下さい。プレゼントの交換を致します。

集会・総務・女性懇談会共催

●富士山展望の忘年山行'91

忍草から三山をかせいで内野へ。回遊コースです。出発から下山まで、雪冠の富士山を仰ぎ見ての山歩きです。小さな冬山気分も満喫できるでしょう。集委員会推奨のハイキングで今年を締めくくりませんか。

月日 平成三年十二月十五日(日)

目的 高座山、杓子山(一五九八m)

鹿留山(一六三二m) 歩行四時間半

集合 富士急大月駅構内七時四十分

会費 五〇〇円(写真代その他)

持参 弁当、中間食、水筒、防寒衣、スパッツ、懐電、手袋等

申込み ハガキに氏名、年齢、住所、電話、会員番号を記入の上、ルム集委員会宛申込んで下さい。(集委・高沢)

訂正 九月号(五五六)九頁、二段二十行目、札幌山岳会の三十七名は「道新文化センター一般募集の三十七名」、十月号(五五七)十一頁二段後より十三行目「上田幸雄氏」とあるのは「土田幸雄氏」の誤りにつき訂正致します。(〇)

平成三年十一月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 小倉厚

電話東京(326)四四三三

振替口座 東京三〇四八二九番

東京都港区赤坂一三三六

赤坂グレイスビル

印刷所 株式会社 技報堂